



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	英語の「否定」の意味体系の指導に向けて：いわゆる「否定辞繰り上げ」の取り扱い
Author(s)	巨理, 陽一
Citation	教授学の探究, 20, 109-117
Issue Date	2003-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/13639
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_p109-117.pdf



英語の「否定」の意味体系の指導に向けて

—— いわゆる「否定辞繰り上げ」の取り扱い ——

巨 理 陽 一

(北海道大学大学院教育学研究科修士課程1年)

1. はじめに

外国語教育としての英語教育における「否定」の取り扱いは、そのほとんどが「文法事項の付属品」あるいは「『肯定文』に(一対一で)対応するもの」という捉え方によるもので、英語の「否定」それ自体をとり上げるようなものではない。しかし日英語を問わず、否定は「複合的な意味・機能領域」(工藤, 2000: 95)である。「文法事項の付属品」という捉え方では「否定」は非体系的な羅列になってしまい、学習者は十分な理解を得ることができない。また、「『肯定』の反対」という捉え方では「否定」が非常に曖昧なものになってしまう。それでは「否定」による豊かな表現可能性を学習者に理解させることができない。

明示的に「否定」を表す語彙項目の一つである‘not’に限ってみても、その意味は多様である。例えば(1b)は、「『彼女が幸せではない』ことを『断定する』」という意味を表す場合と「『彼女が幸せである』ということ『否認する』」という意味を表す場合がある(工藤, 2000: 96)。前者は(1c)に近い意味を表すが、後者は彼女が〈幸せ〉か〈不幸〉かということをはっきりと明言していない(毛利, 1972: 120; Celce-Murcia & Larsen-Freeman, 1999: 195を参照)。つまり「否定」の表す意味は、必ずしも肯定と一対一で対応するわけではないのである。

- (1) a. She is happy.
- b. She is not happy.
- c. She is unhappy.

本稿では、「否定」が持つこのような多様な意味を体系的に指導するために、中右(1994)の枠組みに基づいてモダリティに関わる否定と命題内容に関わる否定を峻別する必要があることを述べる。その具体的な例として、従来の指導ではきちんと説明されてこなかった「否定辞繰り上げ」と呼ばれる現象をとり上げ、中右(1994)の枠組みに基づくことで体系的な説明が可能であることを示す。

2. 二種類の否定：モダリティ内否定と命題否定

ここではまず、文の意味を構成する二大成分であるモダリティと命題内容について述べ、次に、モダリティを構成している「命題態度」の下位類型について述べる。モダリティと命題内容の区別自体は多くの言語学者が採用しているが、それぞれの階層的把握や階層内の下位類型は中右(1994)の枠組みに基づくものである。したがって本稿では、モダリティと命題内容の定義についても中右(1994)あるいは中右(1980)に依拠することにする。最後に、このよう

な枠組みに基づくことで、(1b)のような例がどのように説明されるかということを示す。

2. 1. モダリティと命題内容の峻別

「発話としての文をその内部の意味構成の次元からみると、それは常に『モダリティ』(modality)と『命題(内容)』(proposition (propositional content))との二大成分からなる」(中右, 1983: 548)。

命題内容とは、話し手が「切りとった現実世界の状況(出来事, 状態, 行為, 過程など)を叙述したものである」(中右, 1980: 159)。命題内容は、話し手によって「客体化された」、話し手の「外側にあるとされる客観的世界を指示している」(中右, 1980: 159)。もちろんこれには話し手自身の状態や行動も含まれる。命題内容は、中立命題(主語と述部からなる, どんな文にも含まれる意味成分)に肯定(positive)か否定(negative)の値を付与して形成される階層的な意味成分である(中右, 1994: 22)。「否定」に関する限りで言えば、命題内容は、中立命題を肯定の側から叙述するか, 否定の側から叙述するかという違いを表す部分である。つまり命題内容の部分における「否定」は、過去や現在の「世界の状況」(のあり様)が「ある(あった)こと」あるいは「ない(なかった)こと」という、話し手にとっての客観的内容を言い表すときの「みとめ方」(工藤, 2000: 100)に関わっている。

モダリティとは、さしあたり「話し手の発話時点における心的態度」(中右, 1994: 20)と定義することができる。つまりモダリティは、「発話の時点においてのみ有効な」、「客体化し得ない」話し手の「内側の主観的世界を指示している」(中右, 1980: 159)。否定は、この命題内容とモダリティにまたがる概念である。モダリティは、「命題態度」を表すもの(Sモダリティ)と「発話態度」を表すもの(Dモダリティ)という二つのタイプに区別することができる。命題態度とは、話し手が命題内容「に対してとる信任態度(コミットメント)のことをいう」(中右, 1994: 54)のに対し、「発話態度とは、一定の談話コンテキストのもとで話し手がみずからの発話行為についていづく何らかの意識(意図, 姿勢)のことである」(中右, 1994: 41)。発話態度は「談話要因に起因する随意的意味成分」(中右, 1994: 21)であるが、命題態度は「文が典型的な独立節として成立するための意味論的条件」(中右, 1994: 34)であって、「文に内在的な義務的意味成分」(中右, 1994: 21)である。「否定」に関する限りで言えば、モダリティは、命題内容を話し手がどう提示するかということを表す部分である。つまりモダリティの部分における「否定」は、「(そのことを)認めない」とか「(そうは)思わない」といった、様々な形での主観的判断を表すときの「提示の仕方」に関わっている。

2. 2. 命題態度の下位類型

本稿で取り扱うのは「否定」を表す文の意味であるから、モダリティで取り扱うのは命題態度に限定される。命題態度は、その「提示の仕方」の特性と命題内容との関わりで5つに大きく分類される(中右, 1994: 54-58)。命題態度の下位類型をいくつかの例とあわせて以下に示す。

- (2) 真偽判断のモダリティ(modality of truth judgment)
 - a. (認識的用法¹⁾の may, must can, will, would, should, could, might
 - b. I (don't) think/believe/suppose/assume/expect, I'm (not) sure/certain など

- c. I say/assert/claim/report, I tell/inform you など
- d. It seems/appears (to me) など
- (3) 判断保留のモダリティ (modality of judgment withholding)
 - a. I wonder, I ask you (if)
 - b. It is said/rumored, They say, I hear, I'm told (that)
- (4) 是非判断のモダリティ (modality of (dis)approval)
 - a. I doubt/disbelieve, I deny/don't say, I admit/agree/confirm/disagree (that)
 - b. I approve/disapprove (of)
- (5) 価値判断のモダリティ (modality of value judgment)
 - a. I regret/am sorry, I resent/repent/like/hate it (that),
I am surprised/annoyed/disappointed, I find it odd/surprising (that)
 - b. to my surprise, to my regret, curiously enough, interestingly, unfortunately
 - c. foolishly, wisely, stupidly, cleverly
- (6) 拘束判断のモダリティ (modality of deontic judgment)
 - a. I promise (you) (to/that), I offer/propose (to)
 - b. I ask/order/permit/tell you (to), I ask/order/command/request (that)
 - c. I intend/want/would like/hope (to)
 - d. (you, he) may, can, must, should, ought to
 - e. may, can, might (I) ?

「真偽判断のモダリティ」は、「話し手が命題内容の真理値(真偽いずれかの値)について、肯定的あるいは否定的に断定・推定するモダリティ」「いわゆる断定判断, 推定判断のことを指す」(中右, 1994: 54-55)。この場合, 命題内容は「非既定的」(non-pre-established)である。非既定的な命題とは、「そこに込められた情報を発話時点においてはじめて談話の世界に提示するものとして, 話し手が把握している命題のこと」(中右, 1994: 55)を言う。

「判断保留のモダリティ」は、「命題内容の真理値について, その真偽判断を保留し, 中立的な立場を表明ないしは含意するモダリティ」を指し, ここには「①疑問・質問態度と②伝聞判断」, 「③平叙文直説法(つまりモダリティが無標の場合)に特有な陳述態度」も加えることができる(中右, 1994: 56)

「是非判断のモダリティ」とは、「命題内容の真理値について, その是非を認定するモダリティ」を言い, 「是認, 承認, 確認, 承諾など賛意表明, および否認, 否決, 反論, 異議申し立てなど反対表明の立場を指す」(中右, 1994: 56)。この場合, 命題内容は「既定的」(pre-established) (中右, 1994: 56)である。既定的な命題とは、「その情報が発話時点に先立ってすでに談話の世界に提示されているものとして話し手が認識している命題のこと」(中右, 1994: 56)を言う。つまり、「そこで問題となる命題内容は, その真偽のほどは別として, その場ですでに了解済みの情報とされるもの」であり, 「典型的には, 非叙実的な既定動詞が関与する主節表現である」(中右, 1994: 56)。「非叙実的」(non-factive)な命題とは, 「補文で表現される命題について話し手は真の態度も偽の態度も言明しない」(Lyons, 1977: 795)命題のことを言う。

1) モダリティの中で, 話し手の判断にかかわる用法(大竹, 1998参照)。

「価値判断のモダリティ」とは、「命題内容が指し示す特定の状況について、情緒的反応を示したり評価を下したりするモダリティ」(中右, 1994: 56)を言う。この場合、命題内容は「叙実的」(factive)である。叙実的な命題とは、話し手が「命題内容の真実性を前提としないかぎり、それが指し示す状況に対して情緒的価値判断を表明することはできない」(中右, 1994: 57)命題のことである。

「拘束判断のモダリティ」とは、「命題内容が指し示す未来の行為の実現に関して、その行為遂行者を拘束する話し手の立場を表明するモダリティ」(中右, 1994: 57)を言い、「命題内容の真理値という視点からいいおせば、その行為が実現した時点で、それを表す命題内容が真になるという含み」(中右, 1994: 57)がある。

2.3. モダリティ内否定と命題否定

このような枠組みに基づくことで、(1b)が二つの意味を持つという事実はどのように説明されるのだろうか。「二重否定の発想と論理」(中右, 1994: 121-137)で展開されている意味表示の枠組みをかりれば、(1b)の二つの意味は(7)のように表すことができる。

- (7) a. [_{SM} I REJECT IT AS NOT TRUE] [_{P4} POS [_{P3} SHE IS HAPPY]]
 b. [_{SM} I ACCEPT IT AS TRUE] [_{P4} NOT [_{P3} SHE IS HAPPY]]

[_{SM}]の部分で命題態度を表し、[_{P4}]で囲まれた全体が命題内容を表している。命題内容は、[_{P3}]で囲まれた中立命題(この場合 SHE IS HAPPY)と肯定(POS)あるいは否定(NOT)の組合せで表現されている。大文字は、これが意味論的なメタ言語であることを示している。つまり(7a)は、SHE IS HAPPYという世界の状況を肯定の側から「彼女は幸せである」と叙述し、それを打ち消す態度を示すことで、「彼女は幸せというわけではない」ということを表現していると解釈される。一方(7b)は、SHE IS HAPPYという世界の状況を否定の側から叙述し、それをそのまま認めて述べる態度を示すことで、「彼女は幸せではない」ということを表現していると解釈される。

平叙文の直説法は、モダリティに関しては無標である。モダリティが無標の場合の文は、直接的で簡明な事実を述べ伝えているとされ、「定言的断定」(categorical assertions)と呼ばれる(Lyons, 1977: 750, 797を参照)。定言的断定は、「話し手が一切の留保条件を付けずに伝達情報を厳然たる事実として提示している陳述」(中右, 1994: 75)と定義されるが、これに当たるのは(7b)の方の解釈であることが分かる。そして、確かに「直説法平叙文のモダリティは、そうでないとする特別な理由がないかぎり、『定言的断定』の陳述を表す」(中右, 1994: 76)のである。その意味で(7b)の解釈は、(7a)の解釈と比べて無標の場合であると言うことができる。

とすると、(7a)は「そうでないとする特別な理由」がある時の有標の解釈だということになる。2.2の分類によれば、平叙文の直説法は「判断保留のモダリティ」を表すことがある。このことはつまり、「平叙文がたとえ直説法ではあっても、なにか特別な理由によって、<定言的断定の陳述>よりはむしろ<断定保留の陳述>として解釈される場合がある」(中右, 1994: 76)ということを示している。これは、例えば(8)のような先行文脈があるような場合に当てはまり、その場合の(1b)は、(7a)のように「彼女は幸せである」ということを却下しながらも、「そ

の命題内容について中立的な立場である」ということを含意する。つまり話し手は、(1c)のような「彼女は不幸だ」という定言的断定で相手に言質を与えることを避ける言い方として(1b)を選択していると考えられるのである。

(8) They say that she is happy, but...

(7a)のような「否定」をモダリティ内否定と呼び、(7b)のような「否定」を命題否定と呼ぶ。ただし、(7)のような命題態度の意味表示はモダリティが無標の場合の最も基本的な枠組みであり、他の命題態度をモダリティ成分として含むような文は、その命題態度(や語彙項目)が固有に持つ意味をそこに組み込んだ表示で表されることになる(中右, 1994: 131-134)。それでも、この基本的枠組みがそれらを一貫した否定の構造を一般的に明らかにしているとするれば、この枠組みに基づくことで、(肯定との対比も含む形での)否定の多様な形式を一貫した意味体系を説明する可能性が開かれるのではないかと思われる。次節ではその例証を試みることにしたい。

3. 「否定辞繰り上げ」について

3.1. いわゆる「否定辞繰り上げ」とその取り扱い

言語学で「否定辞繰り上げ」(neg-raising, 「否定語上昇」, 「転移」とも呼ばれる)と呼ばれる現象がある。次の(9)に見られるように、「believe, expect, suppose, guess, imagine, reckon, suspect, think, fancyなどの『推測』を表す動詞類の場合、〈口語〉では、従節が否定されていると思われるときにも主節にneg('not'や'no'などの否定語を指す——引用者)を置く傾向がある」というものである(安藤, 1985: 186)。

- (9) a. I think it won't rain.
b. I don't think it will rain.

学校英語では、「日本語ではふつう『雨は降らないと思う』と言うが」、英語では(2a)と言うよりも(9b)と言う方が「自然で普通である」と説明されることが多い(江川, 1991: 157)。その根拠として採用されるのが、「英語では否定語は一般になるべく文頭に置く傾向があるからだ」という説明である(中川, 1996: 165)。

しかし、日本語でも「雨が降るとは思わない」とごく自然に言うことができるのに、どうして「雨は降らないと思う」が「ふつう」なのか。さらに、「英語では文頭に置く傾向」という根拠があるとすれば、日本語の場合、普通の言い方であるとされる「雨は降らないと思う」の「ない」が文頭にも文末にもないことはどのように説明されるのだろうか。このような説明では、こういった疑問がすぐに持ち上がる。少なくとも(9)の両文が全く同じ意味でどちらかが「自然で普通である」という捉え方による説明では、学習者に「英語(あるいは日本語)というのは何て気まぐれな言語なんだ」と感じさせるだけで満足な理解は与えられまい。

中には、これらの間に意味の違いを認める立場から、「従節にnotのある場合は、主節にある場合よりも、話し手は強い確信をもって従節の内容を否定している」という説明を加えるものもある(安藤, 1985: 187)。この説明は確かに事実と合っている。しかしこれだけでは、なぜ「確信」が強いのかということも、なぜ(9b)のほうが「自然で普通である」と説明されるのか

ということも分からないままである。つまり英語学習者の多くが知りたいのは、「話し手がその『強い確信』を持っているときでも、(9b)を使うことが多いのはどうしてか」ということであろう。さらに英語の「否定」の指導にとっては、「否定辞繰り上げ」と捉えられる現象を特殊なものとして切り離して扱うのではなく、他の否定表現との関連が分かるように指導することが重要だと考える。

3. 2. 二種類の否定による説明：意味の違い

2. で述べた枠組みに基づくことで、(7)のように、(9)を次の(10)のような意味表示で表すことができる。(10a)が(9a)に対応し、(10b)が(9b)に対応している。主節に生じている not はモダリティ成分であり、that 節に生じている 'not' は命題内容成分だということが分かる。

- (10) a. [_{SM} I THINK] [_{P4} NOT [_{P3} IT WILL RAIN]]
 b. [_{SM} I DON'T THINK] [_{P4} POS [_{P3} IT WILL RAIN]]

この意味表示からも分かるように、少なくとも(9a)と(9b)が同じ意味だということにはならない。つまり(10a)は、(今よりあとの)世界の状況について否定の側から「雨は降らない」と叙述したものに「そう思う」という判断を下している。それに対し(10b)は、(今よりあとの)世界の状況について肯定の側から「雨が降る」と叙述したものに、「そう思わない」という判断を下している。つまり、「雨は降らないと思う」と「雨が降るとは思わない」という日本語では分かりにくい²⁾が、(9b)(=(10b))も(7a)のように、「その命題内容について中立的な立場である」ということを含意して、聞き手に言質を与えることを避ける言い方になっている。というのは、(9a)(=(10a))を用いるとあとで雨が降った場合に文句を言われる可能性があるが、(9b)ならばあとで雨が降っても『降らない』とは言っていないとかかわることができるからである。つまり、話し手が「雨が降らない」という「強い確信」があっても(9b)を用いることが多いのは、そうならなかった(過去の状況について述べた場合は、そうではなかった)場合のための予防措置であると考えられる。強気な態度に出て責任をとりたくはないのである。

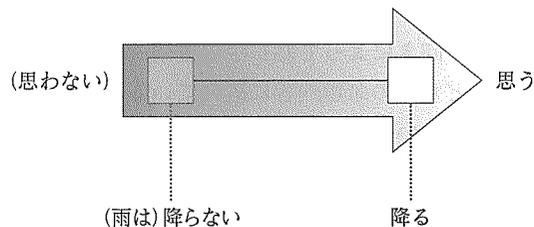
では、このような違いがあるにもかかわらず、(9)のような文が「否定辞繰り上げ」を許すと考えられるのはどうしてだろうか。それには、真偽判断のモダリティの命題内容が持つ特性(2.2参照)が強く関係している。中右(1994)の枠組みによれば、命題態度の下位類型に応じて命題内容がどのようなものであるかということがおおよそ決まってくる。まず、価値判断のモダリティと是非判断のモダリティ・真偽判断のモダリティの一部は、命題内容が叙実的であるか非叙実的であるかという点で大きく対立している(例えば、*I (don't) regret that I cannot attend the party*と言ったとき、「私」が残念に思っているかどうかに関わらず、話し手は「(自分が)パーティーに出席できないこと」を真実のこととして前提にしているが、主節が*I (don't) think*などの場合はそうではない)。その中で、是非判断のモダリティと真偽判断のモ

2) 日本語の場合、むしろ「雨が降るとは思わない」の方が話し手の確信の強い表現のように思える。本稿では中右(1994)に従ったが、少なくとも、(9a)と「雨は降らないと思う」、(9b)と「雨が降るとは思わない」を一対一に対応させることには多少違和感がある。

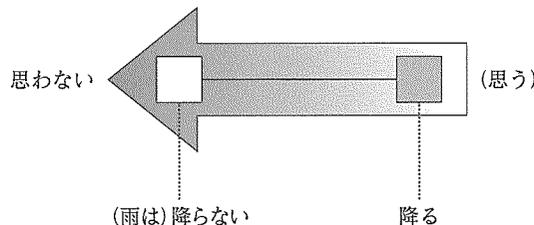
モダリティは、命題内容が既定的であるか非既定的であるかという点で対立している（例えば *They (don't) doubt that frogs have souls* と言うためには、「『カエルに魂がある』ということが既に話題になっている」という話し手の認識が必要だが、*I (don't) think* などの場合は必要ではない）。命題内容の真実性を前提とする「叙実性」という概念と「その情報が発話時点に先立ってすでに談話の世界に提示されているものとして話し手が認識していること」（中右，1994：56）という既定性の概念を区別するのは、「話し手の側でのみ前提とされる種類の知識が存在する」からで、「話し手の側であらかじめ確定している知識は、必ずしも、話し手が真実と見ている知識ではない」からである（中右，1983：549）。

一般に「否定繰り上げ」を認めるとされている動詞は、真偽判断のモダリティに挙げられている動詞に分類されている。つまり、命題内容が「非叙実的」で「非既定的」であることが条件となる。このことから、「否定辞繰り上げ」を認めるように見える文に共通しているのは、その命題内容について話し手がまだ真の態度も偽の態度も言明しておらず、発話時点においてはじめて談話の世界に提示するものだと把握しているために、「みとめ方」や「提示の仕方」がそれほど問題になっていないことだということが分かる。しかし、だからと言って(9)の二つの文の意味が同じだということにはならない。むしろ、このような事実から導き出されるのが、(9b)のような場合のモダリティ内否定が、語用論的に「その命題内容について中立的な立場である」ということを含意して、聞き手に言質を与えることを避ける言い方になっていることの根拠である。つまり、これらの特性が話し手の「中立的な立場」を生み出していることになるものの、命題否定が話し手から見て客観的な世界の状況の切りとりである以上、それに対する主観的な判断であるモダリティ内否定よりも強い主張になるのである。それは(1c)が、(7b)の意味での(1b)より強い主張になるのと同じである。このことは(11)、(12)のような図で示すことができる。

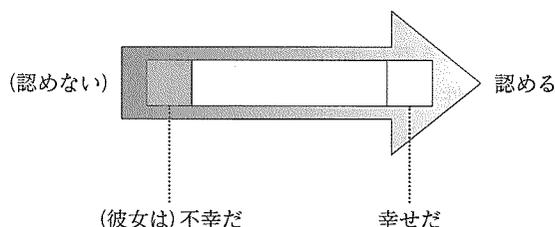
(11) a. I think that it won't rain. (= (9a))



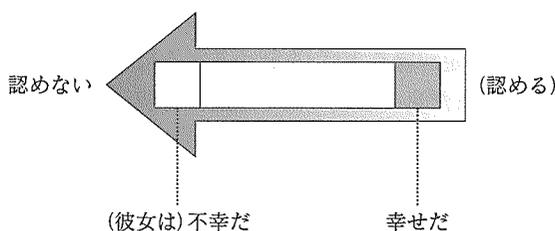
b. I don't think that it will rain. (= (9b))



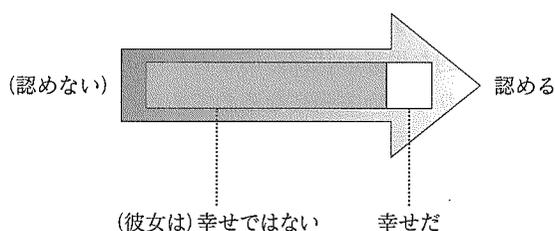
(12) a. She is unhappy. (= (1c))



b. She is not happy. (= (1b) ; (7a)の意味のとき)



c. She is not happy. (= (1b) ; (7b)の意味のとき)



矢印内の四角は命題内容を表し、塗りつぶしによって話し手の「みとめ方」を表している³⁾。矢印は命題態度を表している。向きによって話し手の主観的判断の肯否を表し、グラデーションによってコミットメントをどちらの命題内容に置いているかを表している（コミットメントの度合いについては考慮していない）。グラデーションの濃い部分と塗りつぶしの重なりによって、(11 a) (= (9 a))がより強い主張であることが示されている。逆に言うと、(11 b) (= (9 b))や(12 b) (= (1 b))のように「みとめ方」とコミットメントの不一致で黒い部分が散逸していることが、話し手の「中立的な立場」を示している。このような図示は、意味表示と同様に中右(1994)の枠組みに基づいてはじめて可能になるものであるが、従来「全く意味は同じ」と指導されることの多かった「否定辞繰り上げ」表現を含め、様々な否定の表現の理解を助けるものになるのではないだろうか。

3) (12)の「幸・不幸」は、「両方とも真ではありえないが、両方とも偽ではあり得る」(Pullum & Huddleston, 2002: 793), つまり中間領域を許す「反対」(contraries)の関係にある。一方(11)の「降るか降らないか」は、「両方とも真ではありえないし、両方とも偽でもあり得ない」(Pullum & Huddleston, 2002: 793)「矛盾」(contradiction)の関係にある。この問題については稿を改めて論じることにした。

4. お わ り に

本稿は、文の意味成分に応じて「否定」を区別することで、従来端っこに置かれていたいわゆる「否定辞繰り上げ」と呼ばれる現象に本質的な説明を与えることが可能であることを示した。むしろ、「否定辞繰り上げ」のような構造は「主節にモダリティ内否定、従節に命題否定」という構造になっているので、「(1.や2.で述べてきたような)否定の仕組みがかえって見えやすい」ということが本稿の考察から導き出せるかもしれない。少なくとも、「否定辞繰り上げ」と呼ばれる現象についての正確な理解を得ることが、学習者の表現力を高めるだけでなく、英語の否定の意味体系を理解することにも繋がるということと言えるだろう。そのような指導過程を具体化するためには、本稿で考察した以外の、「否定辞繰り上げ」の範疇に属さない「否定」との関連や違いについての更なる考察が必要である。

典 拠 文 献

- ・ Huddleston, Rodney (2002). “3 The verb.” In Huddleston, Rodney & Pullum, Geoffrey K. (ed.) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 74-212
- ・ Lyons, John (1977). *Semantics* (2 vols.). Cambridge: Cambridge University Press. pp. 768-777
- ・ Pullum, Geoffrey K. & Rodney Huddleston (2002). “9 Negation.” In Huddleston, Rodney & Pullum, Geoffrey K. (ed.) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 785-849
- ・ 安藤貞雄 (1985) 『続・英語教師の文法研究』大修館書店, pp. 177-190
- ・ 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説〔改訂三版〕』研究社出版, pp. 156-167
- ・ 工藤真由美 (2000) 「否定の表現」仁田義雄・益岡隆志編『時・否定と取り立て』〔日本語の文法2〕岩波書店, pp. 93-150
- ・ 中右実 (1980) 「文副詞の比較」國廣哲彌編『文法』〔日英語比較講座2〕大修館書店, pp. 157-219
- ・ 中右実 (1983) 「文の構造と機能」安井稔・中右実・西山佑司・中村捷・山梨正明『意味論』〔英語学大系5〕大修館書店, pp. 548-626
- ・ 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店
- ・ 中川信雄 (1996) 『英文法が分からない!?!』研究社, pp. 165-169

参 考 文 献

- ・ Bolinger, Dwight Le Merton (1977). *Meaning and Form*. London: Longman. pp. 37-65 (中右実訳 (1981) 『意味と形』こびあん書房, pp. 76-131)
- ・ Celce-Murcia, Marianne & Larsen-Freeman, Diane (1999). *The Grammar Book An ESL/EFL Teacher's Course (2ed.)*. Boston: Heinle & Heinle. pp. 183-204
- ・ 大竹政美 (1998) 「英語法助動詞の意味体系の指導に向けて：核意味分析に基づいて」『北海道大学教育学部紀要』〔No. 77〕, pp. 97-114
- ・ 田中実 (1988) 『英語構文ニュアンス事典』北星堂, pp. 146-177
- ・ 毛利可信 (1972) 『意味論から見た英文法』大修館書店, pp. 117-123